慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	酒枝義旗氏 構成体論理的経済学
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.6 (1942. 6) ,p.528(86)- 532(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19420601-0086
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420601-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

酒枝義旗氏「構成體論的經濟學」

氣賀健三

最近の我が國學界に於けるゴットル流の考へ方は激しい勢を以て擴がりつゝあるが、「體斯かる考へ方は何處に其特質を持つものであるかといふことについては必ずしも汎く了解せられてゐなかつた樣である。

其理由は一つにはゴットル其人の難解なる用語や說明に依ることにもあるが、もつと根本的な理由は、此考へ方が在來の經濟學の研究の態度乃至事象認識の方法に徹底的な方向轉換を行つて、全く新しい態度を以て現實の把權に向はうとするが爲であると思はれる。從つて我々の如く在來の思惟方法に慣れてきたものにとつては、一見漠然たる問題を漠然たる新造語を以て說く異端的な新說の如き感を與へたのである。

然るに今酒枝敎授の新著「構成體論的經濟學」は我々の斯樣な疑ひに答へて、ゴットル思想の眞髓を、敎授自らの眞劍な反省を通じて我々の前に展開してくれた。

此書に於て我々は特に二つの根本的な理說に興味を持つた。其一つは在來の認識批判的態度に對する鋭い批判であり、他の一つは「構成體論的思惟」——生活體系の反省の立場——に於ける烈々たる實踐的意志の强調である。

其論旨をこゝに簡單に紹介することは不可能である。敎授の主張の正しい意味を把握する爲には此書物全體を讀

んで貰ふより外はない。我々は唯こゝ認識批判的立場に立つものゝ一人として此書の中で受けた批判に答へ、併せて構成體的思惟に對する一つの疑問を提出して見たいと思ふのである。

敎授に依れば構成體的思惟は矢張り對象の一面的抽象であるには相違ないが、認識論的立場に於ける如く表面的現象の形式的抽象でなくして、我々の生活體驗の反省に依つて人間共同生活の全體をそのまゝ內容とする思惟であるといふ、而して此考へ方に在つて本質的なことは、各人格的主體が構成體の成員として、「構成體の存活の理性の强制」に於て生活するといふ事實を常に其內容として持つことである。

之に對して認識批判的立場に立つ在來の經濟理論は、恣意的な認識興味に從つて、對象の一面を局部的に捉へ、以て全體的把握を斷念し、例へば箱庭趣味に滿足して、大自然の世界へ反省を及ぼさないといはれる。

認識批判的立場が酒枝敎授のいはれる生活體驗の反省に於て不充分であるといふことは、正に敎授の立場を承認してかゝる以上承認せられなければなるまい。併し我々はさうしない理由を充分に持つと考へる。

我々の考へ方が敎授のいはれる定義的概念——多義的なる常識用語の一方的、恣意的限定——に滿足しないものであることはいふまでもない。價値關係的な嚴格な論理主義は屢々形式主義の名を以て批難されるものであるが、畢竟するに認識對象の把握に當つて其意味する內容の正確と明瞭を尊ぶが故であり、單なる觀念的構成物を作り上げる爲の便宜主義に基づくものでは決してない。要は如何によく現實の把握の正確を期し得るやといふことに在る。

屢々用語の爭ひ、概念の爭ひが起るとすれば、それは論爭の當の相手も亦其爭はれる用語なる概念を以て同じ內容を理解してゐると豫定してゐるからに外ならない。かゝる豫定の下に於ては從つて相手に向つて言葉に捉はれたりなどゝ批難する考へは思ひ付かないのである。現に正に酒枝敎授の言はれる通り定義されてる內容と解釋が共通な

らば表現の方法は敢て問題とするに足りないであらう。

認識批判的立場が認識の一面性、抽象性を強調する所以も亦理論の一義的明確性に在るといはなければならぬ。それは棟割長屋で滿足する心持とは雲泥の相違である。所謂る分離思想（Trennungsgedanke）は其自體の爲に必要視されるのではなくして、全體の理解の爲に必要な分析的論理の現れと見なければならぬ。逆説的かもしれないが、專門分科的研究を通じてある全體の一面が統一的に理解されると考へるのである。而してそれは、同時に研究がその分野丈けで完了するなど、滿ち足りた心を毛頭持つものではない筈である。矢張り全體の把握が其究極の目標を爲す。その爲に併しそれは全面的統一的觀察を欲張ることなく、各種專門分科の協力を欲するものである。

以上の點よりも更に重要な點、酒枝教授にとつて看逃し難いことは、我々のなず一面的抽象が人間の活動の構成體としての生活適應の實踐的意慾を捨てゝ居るといふことであらう。教授に在つてはそれは生活現象の理解に於て本質的なるものを見失ふことになるのである。

認識批判的立場が「構成體論的經濟學の說くが如き意志的なるもの、實踐的なるものを問題の中心に取擧げないのは、簡單に言へば、一つには斯くの如きものが現實に働く限りに於て必ず客體の上に反映するが故に客體の論理を追ふことに於て主體の活動が理解されるのである。客體の論理自體が主體の活動を內に含むものであることは自明的のことがらである。酒枝教授は斯かる考へ方を以て人間共同生活の根本的動向を爲す所の親和と背反の關係に於ける意欲の充實を見ないロビンソン的孤立人の論理であると解せられるが、端的に言つて私はさう考へない。意欲の充實の背後に在るものが親和の關係であるか背反の關係であるかといふことは我々の立場からすれば直接の問題にならない。

而して斯樣な立場よりすれば正に教授の指摘する通り主體の實踐性、又は教授の言葉によれば「主體間の協力の關係の秩序づけ」構成體の生きんとする意志の實現、といふ精神的要素は其ものとして直接に把握されることはない。それは客體の働きに於て觀察されるに過ぎない。

斯くの如き態度は酒枝教授の以て熱心に排斥されんとしたものと思はれるが、それは併し決して理由のないことではないのである。

即ちそれは構成體思惟に內在する當爲的性格の故である。

生活體驗の反省の立場は正に當爲的要求を形而上學の世界から引降して生き〳〵とせる我々の日常體驗の中に基礎づけようとするものであらう。酒枝教授の全卷の中心は正に此點に在ると思はれるのであり、我々は之を讀んで教授の論理の精密、親切、周到に感嘆するのであるが、猶ほ我々の認識論に捉はれたる心は構成體論的思惟の客觀的妥當性に對して一抹の疑なきを得ない。

教授に在つては人格的主體の生活の正しさは、其背後に立つ構成體主體の成員としての自覺に依つて保たれる。此構成體主體の生活——其生きんとする意欲の充實——は究極に於て人間共同生活の最高の構成體主體と考へられる國家の構成體の存活の理性に依つて其正しさを保證される。

我々は自らの生活、自らの日常の活動を反省して、それが構成體の自覺を通じて爲されることを卒直に承認することができるであらう。併しながら意欲の充實の妥當性の問題はそれを認めて猶ほ然る後に在るのである。即ち人格的主體の構成體的反省其自體に依つて其正しさが認められるのでなく、如何に自覺するかといふことは必ずしも一樣に明確でない所に問題がある。何人と雖も持續的な協力への反省が爲されるとしても、其仕方は一義的ではあ

り得ない。構成體的思惟の最高の規準は、國家的構成體に於ける生きんとする意志に基づく意欲の充實であらう。我々としても國家的なる共同生活體の存活を疑はうとするのではない。之の持續的に生きんとする意志の絶對的、無條件的承認に躊躇する必要はない。然るに問題は單に生きるといふことに在るのでなく、如何に生きるか、如何なる意欲を充實せしむべきかに在る。それは人が生活主體の意欲其自體を直接の問題として取上げて其妥當性を主張せんとする以上、當然起つてくる疑問である。而して如何に生きるかは無條件的に構成體的主體のあらゆる意欲を無條件的に承認すべき結論を生むものではあるまい。人はすべて人間であるより先きに日本人であり、ドイツ人であり、イギリス人であるといふことは必ずしも此疑問に對する充分な答ではない。人は總てある國民の一人である以上、其國民のみを考へればよいといふなら我々は沈默するより仕方がないけれども、其國民は爾餘の幾多の國民と相競ひ、相和し、相爭つて並在する以上、我々は當然生活共同體の生きんとする意志の正しさを他の生活共同體にまで及ぼしうるようにしなければならないであらう。かゝる時構成體の指導的地位に在る人々は或は永遠の正義を、或は人類の幸福を、或は世界の平和をそれ〴〵の立場の下に說くのである。こゝに我々は倫理的なるもの、超越性、形而上的性格を見る。如何に生きるか――衰滅するか、永存するかの二つの可能性丈けの問題に止まらない――の充實せられべきある意欲の絶對的な正しさは其究極に於て形而上的なものであるとする我々の考へもそこにある。

如何に生きるかの一義的規定は構成體の具體的、歷史的在りかたに依つて定つてくるのであつて、構成體一般の本質を說く場合の問題ではないといふかも知れぬ。ある程度までそれは正しいけれども、一概にさういひきることは許されない。もろ〴〵の意欲の充實のしかたに於ける選擇と決定は相對的な性格を拭ひ去り得ないものである。

而して我々の社會科學的研究の任務は實に「歷史的發展の中に此相對性を――可及的客觀的ならしめ、可及的妥當性を基礎つけることに在るのではあるまいか。換言すれば意欲充實の客觀的可能性（又は不可能性）を明示することに科學的研究の任務があると思ふ。それは何等かの意欲を實現する爲に必須不可缺の豫備的思惟である。我々の立場が直接に意志的なるものを取擧げず、規範的相對性を避けようとする所以は生きんとする意志の力を無視するからでなく、寧ろそれの實現の妥當性を可能なる限りに於て明かにしようするからに外ならぬ。こゝに於て、「それは如何にして可能なりや」といふカント的な問題提出の仕方の是認せらるべき理由が存すると信ずる。

「眞の」正しさ、實踐的意志の究極の判斷は併し歷史が解決する。我々にとつて確實に豫測し難き歷史の經過が之を解決する。歷史は確かに人間が意欲を以て作る。併し必ずしも思ふ通りに作られるとはいへない。而して社會科學の任務は人間の意欲に對して其が可能なる、諸々の關聯を敎へることにあると我々は考へて居る。存在と當爲の分離は其爲に必要な研究上の論理的方法である。我々の研究態度が當爲の問題を當爲なるが故に之を疏かにしたことは我々として酒枝敎授の苦心の著書に依つて大いに敎へられ且つ反省しなければならぬ。

我々は敎授が後續の卷に於て此處に問題とした構成體一般の問題、根本的關係としての協力の關係の概論から更に進んで、具體的歷史的な在り方に於ける諸々の構成體に於ける協力の關係を詳說せられることに大きな期待を持つ。

自らは、敎授の如き深き體驗的反省の足らざることを憂ひつゝ、敎授に對して高い尊敬の念を以て筆を擱く。